



しびき



CONTENTS

- 1 ICDM 役員会 開催報告
- 2 AOSD 役員会 開催報告
- 3 第7回 AOSD 国際会議 事前配布状
- 4 鋼製ドラムは、リサイクルの優等生
- 5 我が社の生い立ちーJFEコンティナー株式会社
- 6 新社長登場ー東邦シートフレイム株式会社
- 7 化学産業の出荷額構成比の推移と概況
- 8 平成21年度 上期出荷実績

58



ICDM 役員会メンバー
 左から2人目：中島 AOSD 会長
 左から3人目：ダージェンティス ICDM 及び SSCI 会長
 左から7人目：ボウム SEFA 会長

世界不況を乗り越え、 新たな発展を目指して——

ICDM 役員会

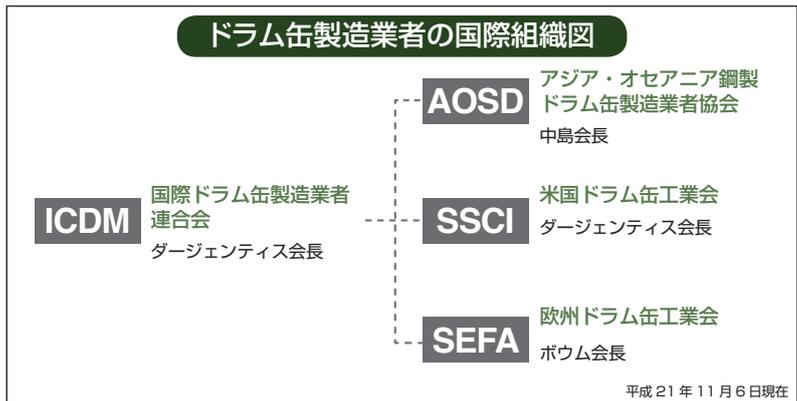
平成21年11月6日 (金) / イタリア・ローマ

11月6日 (金)、ドラム缶製造業者の世界組織である ICDM 役員会がイタリア・ローマで開催され、ICDM 副会長で AOSD 会長でもある、日本ドラム缶工業会の中島理事長が出席しました。

昨年9月のリーマンショックに端を発する世界不況下での、アジア、アメリカ、ヨーロッパ各地域での活動報告の他に、グローバルな事項にも時間を割いて意見交換がなされました。国連危険物輸送専門家小委員会の議長が交替予定との連絡もあり、当専門家小委員会への対応も SEFA を中心にこれまで以上に行うことになりました。

本年9月に予定されていた第2回産業容器国際会議は、準備期間が世界不況と重なり、最終的に取り止めとなりましたが、ICDM は2011年にドイツで国際会議を開催しようとの提案が SEFA からあり、各地域団体ともその方向で前向きに検討することになりました。

国際会議に関しては、AOSD から2010年9月に第7回 AOSD 国際会議を福岡で開催するとのアナウンスを事前配布状 (3頁参照) を用いて行いました。世界の製造中心となったアジアと、環境や規格化で実力を持つヨーロッパで、有意義な国際会議が開催されることが期待されています。



世界不況を乗り越え 第7回AOSD国際会議 開催を決定

AOSD役員会

平成21年9月30日(水) / タイ・バンコク

9月30日(水)、ドラム缶製造業者のアジア・オセアニア組織であるAOSDの役員会が、タイ・バンコクで開催されました。本年9月に予定されていた第2回産業容器国際会議は準備期間が世界不況と重なり開催されなかったため、それに合わせてAOSD役員会を行うことができず、新たに準備しての開催となりました。

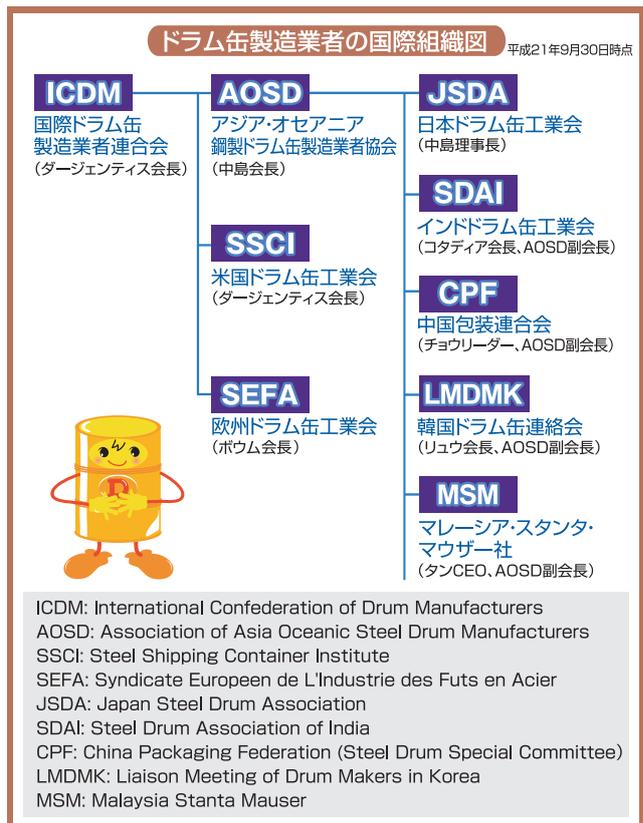
AOSDでは順風満帆のときのみならず、不況で苦しい時期にも、国際会議を開催して情報交換をすることが有益との考えが強く、3年毎のAOSD国際会議は先の見えない時期でも開く方がよいという雰囲気がありました。予定通り2010年にAOSD国際会議を開くには、正式に機関決定して準備に掛る必要があります、この時期に役員会を行うことになりました。直前のアクシデントや急な予定変更による代理出席や委任状の提出などもありましたが、AOSD役員会は支障なく執り行われました。

第7回AOSD国際会議の時期と場所に関しては、JSDA提案の以下の案で了承されました。

第7回AOSD国際会議
2010年9月8～9日 福岡にて

この決定に従って作成した事前配布状を3頁に掲載します。

当役員会では、その他世界不況の最悪の時期に、アジア各国でいかにそれに対処して早期の立ち上がりに努力したかの情報交換と議論も、熱心に行われました。また、本年11月6日に予定されていたICDM役員会への対応方針なども議論されました。



AOSD役員会メンバー

前列中央: 中島 AOSD 会長

前列左: ジーク・リー 韓国代表代理

前列右: シンチャイ タイ・センタイムタルドラム社 社長代理 (オプザーバー)

The 7th

AOSD International Conference

September 8 – 9 2010

Fukuoka, Japan

Preliminary Circular

Host Japan Steel Drum Association (JSDA)

Date September 8 (Wed) – 9 (Thu)

Optional Tour: 10 (Fri)

Venue JAL Resort SEA HAWK Hotel FUKUOKA

2-2-3 Jigyohama, Chuo-ku, Fukuoka-city,
Fukuoka 810-8650 Japan



AOSD Chairman and JSDA Chairman
Mr. Nakashima

Tea Ceremony



Asia Month Festival (September)



JAL Resort SEA HAWK
Hotel FUKUOKA

Yahoo! Dome

AOSD : Association of Asia-Oceanic Steel Drum Manufacturers



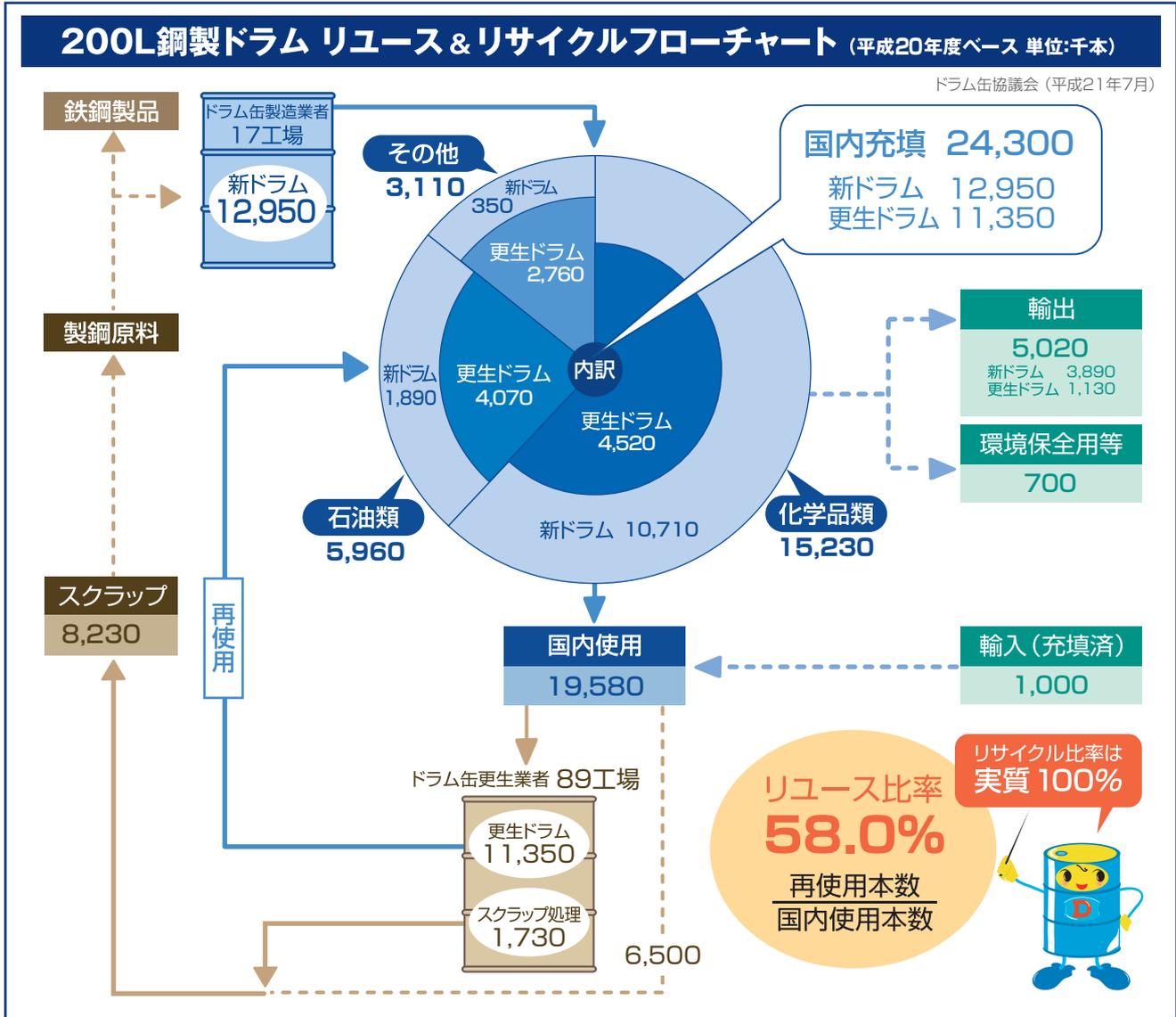
鋼製ドラムは

“リサイクルの優等生”

資源としてのリサイクル比率は実質100%

鋼製ドラムは使用后、一部は更生缶メーカーに回収され、一部はユーザーから直接スクラップ処理業者に回収されています。ドラム缶はこのようにリユース(再使用)およびリサイクル(再利用)が確立しており、循環型リサイクルの優等生といえます。

下の図は平成20年度版200L 鋼製ドラムリユース&リサイクルフローチャートです。ドラム缶のリユース比率は58.0%になりますが、環境保全用ドラム缶を除くと、資源としてのリサイクル比率は実質100%になります。



	当初(平成9年)	14年度ベース	16年度ベース	17年度ベース	18年度ベース	19年度ベース	20年度ベース
工場数	新ドラム	18工場	16工場 (▲1)	17工場 (+1)	17工場 (変わらず)	17工場 (変わらず)	17工場 (変わらず)
	更生ドラム	123工場	97工場 (▲10)	95工場 (▲2)	93工場 (▲2)	91工場 (▲2)	90工場 (▲1)
製造本数	新ドラム	12,000千本	13,590千本 (+12.4%)	15,190千本 (+11.8%)	14,950千本 (▲1.6%)	15,390千本 (+2.9%)	15,800千本 (+2.6%)
	更生ドラム	16,000千本	12,860千本 (▲19.6%)	13,490千本 (+4.9%)	13,660千本 (+1.3%)	13,680千本 (+0.1%)	13,370千本 (▲2.3%)
国内充填	28,000千本	26,450千本 (▲5.5%)	28,680千本 (+8.4%)	28,610千本 (▲0.2%)	29,070千本 (+1.6%)	29,170千本 (+0.3%)	24,300千本 (▲16.7%)
国内使用	26,000千本	22,060千本 (▲15.1%)	23,130千本 (+4.8%)	23,050千本 (▲0.3%)	23,380千本 (+1.4%)	23,390千本 (+0.0%)	19,580千本 (▲16.3%)
リユース比率	61.5%	58.3% (+1.5%)	58.3% (変わらず)	59.2% (+0.9%)	58.5% (▲0.7%)	57.2% (▲1.3%)	58.0% (+0.8%)



JFEコンテナ株式会社
代表取締役社長

中島 廣久

我が社の 生い立ち

● JFEコンテナの発足は、2003年（平成15年）の4月。川鉄コンテナと鋼管ドラムの両社が合併して発足した。両社の親会社である川崎製鉄とNKKが経営統合してJFEスチールになったことに伴うもので、これにより日本市場でトップシェアを持つドラム缶メーカーとして新たなスタートを切った。新会社発足からの6年で、生産体制の集約や国内事業の再編、中国市場での事業拡大、グループ力の強化、新規事業の拡充などを積極的に進めて、総合容器メーカーとして、また東アジアの有力ドラム缶メーカーとして次世代への展開を視野に入れた基盤を固めている。標榜する「オンリーワン&ナンバーワン商品」への市場評価も高く、技術力をベースとした新製品の登場も相次いでいる。

● JFEコンテナの母体となった両社は、それぞれ1961年（昭和36年）に発足している。川鉄コンテナは日本スチールコンテナ（昭和40年）に川鉄コンテナに社名変更として発足し、翌年伊丹工場でのドラム缶の製造を開始した。鋼管ドラムも、1962年（昭和37年）に川崎工場でのドラム缶の製造をスタートしている。

ただ、この両社も、ドラム缶製造のルーツをたどれば、戦前にさかのぼることになる。また現在につながるドラム缶製造の本格的なスタートは昭和20年代半ばといえる。ドラム缶需要の急速な拡大と、製鉄メーカーとしての鋼板の販売先拡大がマッチしてのドラム缶市場の拡大であった。そして、ほぼ10年を経過して、ドラム缶製造部門の独立という形で、両社が発足していく。

● 合併までの40年の両社の歩みは、ドラム缶需要の拡大とユーザーニーズに積極的に対応してきた歴史でもあった。川鉄コンテナは伊丹、千葉、水島を3拠点とし、また鋼管ドラムは、川崎、堺と協和容器（新潟）を拠点として、それぞれ迅速な製品供給体制を築くとともに、パール缶をはじめ多彩な容器を製品化、さらに特殊容器や高圧ガス容器なども手がけて、いずれも総合容器メーカーとしての実績を積み上げてきた。また1998年（平成10年）に川鉄コンテナが、

中国・上海でのドラム缶製造をスタートしたのも、日本のドラム缶業界にとってはエポックメイキングなできごとであった。

● 2003年の合併は、両社の強味を統合し、きめ細かなユーザー対応を充実させるとともに、効率的な生産体制・経営基盤を確立することが求められたものでもあった。まず取り組んだのが、両社の経営融合であり、工場長の異動など人事交流による一体化であった。続いて工場再編を計画、伊丹工場でのドラム缶製造を堺と水島に移管・集約（2006年）し、千葉、川崎、堺、水島とJFE協和容器（新潟）の国内5工場体制とした。水島では国内では初の2直体制を組み、従来通りの生産本数を確保した。さらに受注から製造・販売までの一貫管理システムを導入して、効率的な生産・販売体制を整えた。グループ会社についても事業を再編し、パール缶事業の分割（2004年、メタルワン、新日鉄との事業統合によりジャパンパール発足）、高圧容器メーカーのJFEガスシリンダーと神鋼機器工業の事業統合（2005年、神鋼JFE機器発足）、また18リットル缶についても一部OEMを含めJFE製缶（伊丹）に集約した。合併からの6年について中島社長は「統合はとても良いと思った。両社の技術の統合も進んでいるし、工場と営業の意思の疎通も図れている。グループを含めて一体感が強くなっている。両社が統合に対して前向きに取り組んだことが大きい、この時期、ドラム缶の需要が増えていたことも、タイミングが良かったと思っている」という。

● 中国市場での展開も大きな取り組みであった。傑富意金属容器有限公司（上海）に続き、2008年（平成20年）には中国でのドラム缶製造の第2拠点となる傑富意金属容器有限公司（浙江）を浙江省平湖市に設立した。日本で製造しているドラム缶と同等の品質・技術サービスが同社の基本で、日系企業や欧米企業のユーザーに評価が高く、今後の需要拡大が期待されている。「日本国内でのドラム缶需要量は、ほぼ横ばいでしょうが、中国ではこれから大きく伸びます。2009年末には、第2拠点での2直体制、さらには第3の拠点も検討していきたい」とし、日本と中国の両市場で計1000万本の生産を目指していく。日本国内のユーザーに対しては、さらに高品質な容器を安定して提供し、中国市場にあっては、需要拡大に対して高品質なドラム缶の安定・迅速供給をすることが当面の目標といえる。

● ドラム缶以外にも、総合容器メーカーとして力を入れているのが、高圧ガス容器で、天然ガス自動車の普及に伴い、需要が増えてきている。とくにインドやタイなど海外向けの需要に期待をかけており、さらに先行き燃料電池車での新規需要も期待できるとして、取り組みを強化している。また医療用（携帯）酸素ボンベでも実績を上げている。

東邦シートフレーム株式会社

「ノーアウト満塁で、急遽、マウンドに立った」と、2009年4月の就任時を振り返る東邦シートフレームの下川洋治社長。厳しい経営状態をどう立て直すのか。「奇策は通じません。真正面から向かうしかない」と真つ向勝負で挑んだ上半期。最終月の9月には単月黒字を達成するなど、スピーディな対応が功を奏して、次期への展望も開けつつある。

時代が求める 新しい価値を創造

東邦シートフレーム株式会社 代表取締役社長

下川 洋治



事業基盤強化へ確かな手ごたえ
東邦シートフレームは、建材事業とドラム缶などの容器事業を2つの柱に、アイデッキ、パレット、車両樹脂などの事業を展開している。建材では金属表面特殊コーティングの技術を中心に、多彩な金属サイディングや塗装鋼板を生産しているが、住宅着工件数の減少や世界同時不況などの影響を受けて、売上が伸び悩み、さらにドラム缶需要も2009年1〜3月期は激減するなど、厳しさがつ

まずはスタートの半期で回復への確かな手ごたえをつかんだ。「容器事業で一定の収益を確保し、建材事業を黒字化すれば、回復への道筋が描ける。これから2〜3年の充電期を経て、攻めの経営に移っていく」としている。

技術力へ一歩に強みを活かす

同社の強みは特殊加工の技術力。「メッキ鋼板、ステンレス、アルミなどの薄手の金属への特殊コーティングが得意で、この技術を建材分野以外にも活かしていく」のもこれからのテーマ。すでに金属サイディングにとどまらず、冷蔵庫をはじめとした家電製品への展開も進んでいる。特殊な技術力を活かすのはドラム缶などの容器部門にも言えること。内面コーティングやケミドラムなどクリーン度の高い容器や高気密性のキミツ容器といった特殊缶の比率が全体の30%強を占めるのも同社の特長だ。また特色といえば、スチールドラム缶は、関東エリアを中心とした顧客が中心であることも挙げられる。関東エリアでは20%近いシェアを持ち、ユーザーとのきめ細かなコミュニケーションを基にした迅速な納入対応などにユーザーの評価は高い。「ユーザーから『やはり東邦シートフレームにお願したいな』といわれる会社であること」と顧客と向き合う姿勢も明瞭だ。

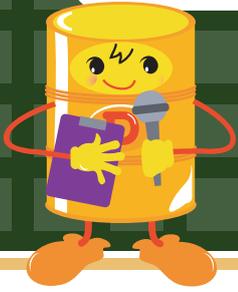
期待担う第3の柱・車両樹脂

「充実期を経て、攻めの経営に入るには、建材と容器に次ぐ明日の糧となる次の収益の柱が必要」と、9月には「開発技術部」を組織した。「中長期の柱となる事業、製品を毎日考える」プロジェクト

的なセクションで、同社が持つ技術力、ノウハウ、強みをどう次代に活かすかがポイント。「AとBをつないだらどうなるか、そのハイブリッド思考に開発のカーギがある」と新たな製品の創出に向かっている。そうした中で、次代の柱の一つとして大きな期待を担うのが「車両樹脂」の製品。2年連続でグッドデザイン賞を受賞した「IGP（商品名）」（複合ユニット窓）や「クリアヒート（商品名）」（発熱ポリカーボネート板）などが、いま、市場で注目されている。IGPはポリカーボネートとガラスのハイブリッド、耐衝撃・耐結露性能に優れた車両用ガラス。クリアヒートはさらに融雪・結露防止能力を高めた発熱する透明な樹脂窓で、鉄道車両用に採用が進んでいるが、鉄道以外にも他の用途への展開が可能。さらにモーターシフトの動きは海外でも顕著で、こうした海外市場でのニーズも見込めるとあって先行き事業拡大の期待は大きい。

何に向けて頑張るのか

下川社長は2004年に新日鉄から東邦シートフレームへ移り、2005年に取締役購買部長、同時に経営企画も担当した。前中期経営計画の策定にも携わり、そして2009年度からの現中計の舵取りとして先頭に立つ。「頑張らなければとよく言いますが、では何に向けて頑張るのか、この会社は何処に向かっているのかという、そのことが一番大事なことで、それを分かりやすく示していきたい」という。事業基盤が固まりつつある手ごたえをつかんだ今、「時代が求める新しい価値を創造」へのスピードをさらにアップするステージへと入ってきた。

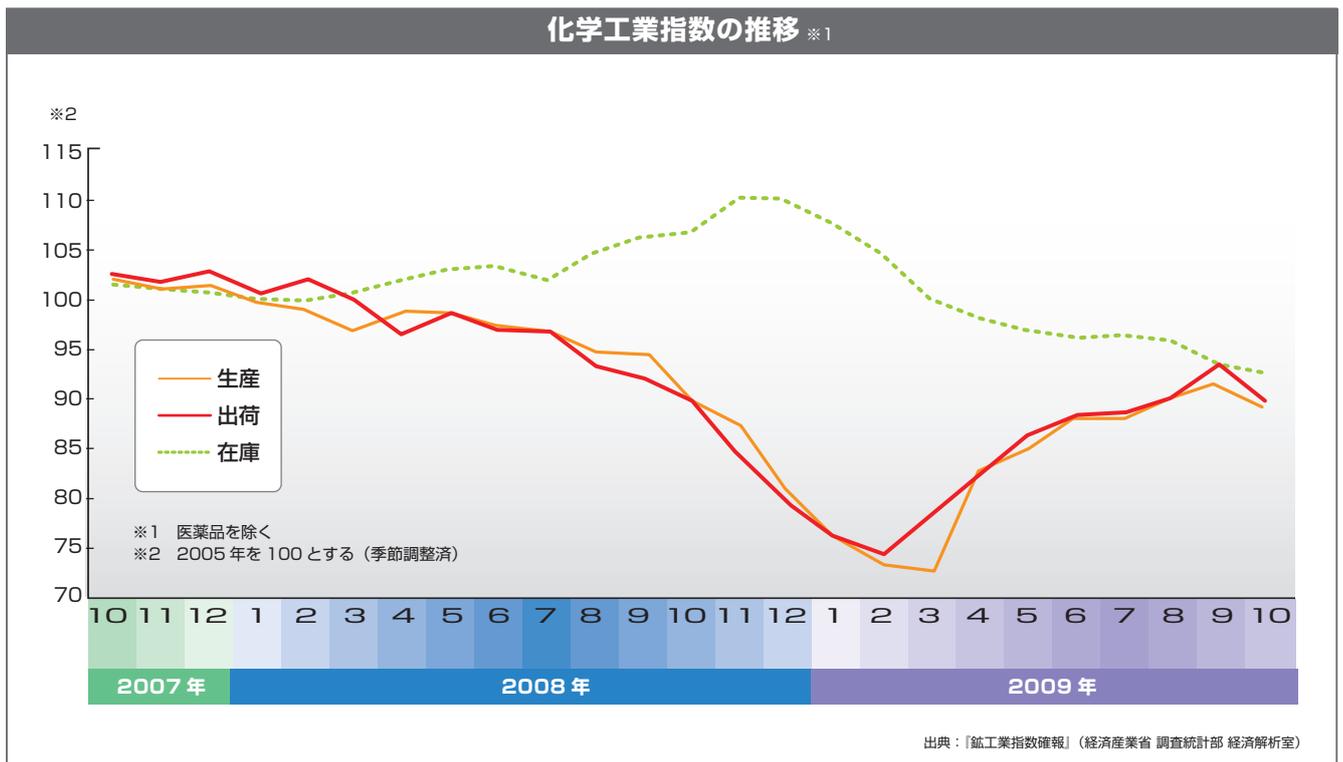
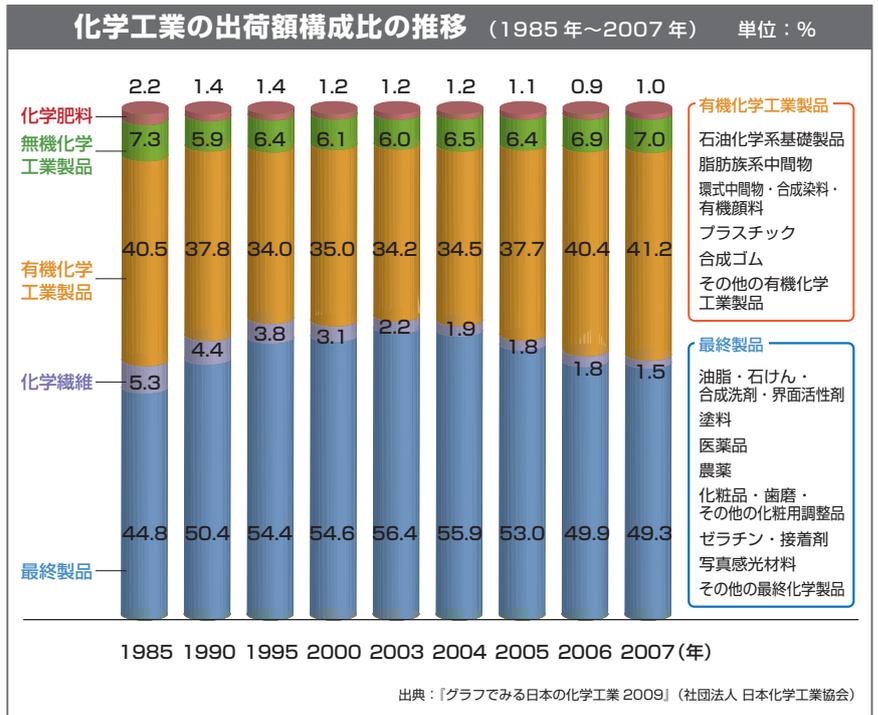


化学産業の出荷額構成比の推移と概況

化学産業は、2008年の原油価格の乱高下、リーマンショックを契機とする世界経済危機で需要が激減し、過去に例がない落ち込みとなりました。

しかし、中国政府の4兆元を超える大型景気刺激策を背景とする自動車生産台数の増加、家電販売量の大幅増加、これに牽引される形で日本の化学品需要も増加していきました。このため化学企業の業績も2009年1～3月を底に回復基調に転じました。また各社とも昨年秋から緊急対策を実施、徹底したコストダウンなどの効果が下支えたことにもよります。

ただ、通期見通しについては急速な回復とはならないと予測されています。



平成21年度 上期出荷実績

平成21年度上期出荷実績は、下表に示す通りとなりました。
200L缶は、前年上期比21.5%減、1,684千本減の6,161千本となりました。ペール缶も、前年上期比16.7%減の9,452千本、中小型缶も、前年上期比30.0%減の330千本となりました。

全ての缶種・用途別において、前年度に比べて大幅な減少となりましたが、それは前年度上期実績は好調、下期に世界不況による大幅な実績低下、その後、今年度上期に持ち直してきた状況を反映しています。

平成21年度 上期(4~9月)出荷実績

(単位：千本)

缶種	用途	石油	化学	塗料	食料品	その他	合計	前年同期比(%)
		普通鋼薄板	200L缶	794	4,863	332	88	84
	ペール缶	4,999	3,883	316		254	9,452	83.3
中小型缶	100L缶	1	48	4		1	54	67.2
	50L缶		56			9	65	57.8
	アス缶型		6				6	-
	その他容量缶	0	204	0		1	205	73.5
	小計	1	314	4	0	11	330	70.0
	その他	200L缶		32	*	1	3	36
	ステンレス缶		7			3	10	80.6
	小計		39	*	1	6	46	84.0
中小型缶	垂鉛鉄板缶		42			95	138	82.4
	ステンレス缶		3				3	89.9
	小計	0	46	0	0	95	141	82.6
合計		5,794	9,145	652	89	450	16,130	83.3
※前年同期比(%)		72.2	79.0	87.6	93.0	87.5	78.5	-
※構成比(%)		16.3	75.3	5.2	1.3	1.9	100.0	-

(注) ※の前年同期比ならびに構成比は、ドラム缶の出荷トン数の前年同期比ならびに構成比。

* は単位未満。

会員

〈正会員〉

- 斎藤ドラム缶工業(株)
- 山陽ドラム缶工業(株)
- JFE協和容器(株)
- JFEコンテナ(株)
- (株)ジャパンペール
- 新邦工業(株)
- ダイカン(株)
- (株)東京ドラム罐製作所

● 東邦シートフレーム(株)

- (株)長尾製缶所
- 日鐵ドラム(株)
- (株)前田製作所
- (株)山本工作所

〈準会員〉

- 森島金属工業(株)

〈賛助会員〉

- エノモト工業(株)
- (株)大和鐵工所
- 三喜プレス工業(株)
- (株)城内製作所
- 東邦工板(株)
- (株)水上工作所

ドラム缶工業会

〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町3-2-10
(鉄鋼会館6階)
TEL 03-3669-5141 FAX 03-3669-2969
e-mail : drum.pail@jsda.gr.jp

URL : <http://www.jsda.gr.jp>

ひびきNo.58(平成21年12月24日発行)

発行人 ドラム缶工業会
常務理事 事務局長 米倉 隆行